

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 支援-31

学校名・団体名	筑北村立聖南中学校
HPアドレス	<a href="https://www.ptcnet.jp/chikuhoku/DATA/BBS/sei_nan/epa5002015092979323795/epa5002015092979323795.htm">https://www.ptcnet.jp/chikuhoku/DATA/BBS/sei_nan/epa5002015092979323795/epa5002015092979323795.htm</a>
コース	学校支援
活動・研究テーマ	被災地訪問、復興ボランティアから学ぶ
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・「被災地訪問」を通して、何ができるか考え行動に移すことで、少しでも被災者の方々を励まし元気づける。</li><li>・「被災地訪問」を通して、被災地の方々の思いや生き方に触れることで、自然への畏敬と命、家族、ふるさとの尊さを学ぶ。</li><li>・被災地の復興に向けて、自分ができることを考えて、実践していこうとする態度を養う。</li></ul>	

## <活動・研究報告>

平成28年度 「被災地訪問」  
期 日 9月10日(土)～11日(日)  
参加人数 生徒48名(吹奏楽部16名 ボランティアチーム21名 男子バスケット部 11名)  
保護者11名 きささげ応援団9名 職員6名 計74名  
訪問先 宮城県南三陸町(戸倉地区・志津川地区・歌津地区)  
現地協力者 後藤一磨さん(南三陸町戸倉仮設住宅在住、語り部ガイド、復興町づくり推進委員)他

### 1 活動内容

#### (1) 5年目を迎えた、宮城県南三陸町への「被災地訪問」に向けて

○昨年「元気を届ける」ために何が出来るか、自主的に考え準備を進めた。主な活動は次の通り。

- ①「被災地訪問新聞」の発行。(「被災地訪問」への思いや準備状況の紹介等、全校生徒・保護者へ取り組み内容を発信し、被災地訪問への意識を高めた。)
- ②南三陸町産の海産物販売。(村の福祉祭りの会場で、南三陸町より取り寄せた海産物を販売し、売上金19,422円を「被災地訪問」の際、南三陸町に支援金として届けた。)
- ③郷土の筑北米を使った「おかき作り」「やしょうま作り」。(地域の方と一緒に、「おかき作り」「やしょうま作り」を行い、「被災地訪問」での交流時、被災地の方々に味わっていただいた。)
- ④復興を願い、全校で取り組んだ「絆君(フェルトマスコット)作り」「芝刈り君(園芸マスコット)作り」(一人一人メッセージを添えて、訪問先の方々に届けた。)
- ④信州型コミュニティスクール「きささげ応援団」(生徒の活動を支援する、保護者地域の方々)への協力の要請。(各チームが現地で活動する際、大人の力が必要なことに関して、生徒から説明と協力の依頼を行った。)

#### (2) 宮城県南三陸町への「被災地訪問」

○各チーム、被災地の方々へ「元気を届ける」ことを目標に交流を行った。

##### <1日目>

吹奏楽部—南三陸町戸倉地区の仮設住宅(旧戸倉中学校)にて、1回目の訪問演奏。その後、仮設住宅の方々との交流。志津川地区の「さんさん商店街」にて2回目の訪問演奏。

ボランティアチーム—2カ所で3つの班に分かれて交流活動。

- ・南三陸町戸倉の仮設住宅と志津川仮設住宅にて「おかき」と筑北村の郷土食「やしょうま」を振る舞う。
- ・仮設住宅にお住まいの方や、吹奏楽部の演奏を聴きに來てくださった方へハンドマッサージを実施。
- ・仮設住宅の子どもたちと一緒に遊び、交流。

男子バスケット部—志津川中学校男子バスケット部と交流試合、交流会を行う。

※全員で、後藤一磨さんの案内の元、「防災対策庁舎跡」を見学。

##### <2日目>

吹奏楽部—宿泊先「高倉荘」さん(歌津地区)近くの公民館にて、3回目の訪問演奏。

ボランティアチーム—3つの班に分かれて交流活動。

※歌津地区公民館にて、前日と同内容の交流活動。

男子バスケット部—宿泊先「清観荘」さんのご主人(漁師)から震災当時のお話を聴く。その後、奉仕作業(わかめ養殖用ロープの手入れ)。

#### (3) 「被災地訪問報告会」の実施

期 日 11月29日(火)

対 象 全校、保護者地域の方

#### (4) 5年間の「被災地訪問」の歩みを刊行

きささげ応援団が主体となって、5年間の「被災地訪問」の取り組みを冊子にして発行。希望者に販売。

### 2 成果と今後に向けて

被災地宮城県南三陸町に「元気を届ける」活動は5年目を迎え、参加生徒数は過去最高の48名となった。被災地での体験や被災地に寄せる思いや願いを、校内外に発信する訪問後の「報告会」(毎年11月に開催)を受けて、自分も「力になりたい」と思う生徒が増えてきている結果でもある。活動内容も志津川仮設住宅を新たに訪問先に加え、交流内容を自ら企画運営するなど、生徒自身の自主性や実践力も昨年以上に高まりをみせてきた。

顔見知りになった被災地の方々の中には、聖南中学校の訪問をチラシ等で知り、当日わざわざ移転先から生徒に会いに来てくださる方もいて、この5年間で培ってきた「心の交流」を実感する場面も多くあった。訪問後も手紙のやり取りを通し親交を深め、訪問だけでない自分なりの「元気の届け方」を実践している生徒もいる。

この5年間の「被災地訪問」で、生徒たちは様々なことを学び、感じてきた。本年度の「報告会」の意見交換の場では、参加者から次のような主旨の発言があった。

- ・先輩たちが「行ってみればわかる。」と言っていた意味が、実際訪問することでわかった。先輩たちが大切にしてきた南三陸町の人たちとの「つながり」を、これからも大事にしていきたい。
- ・震災により被災地の方々が経験した悲しみや辛さの大きさを考えると、自分たちの今の生活はありがたいことだと感謝しなくてはならない。
- ・私たちの訪問を、毎年楽しみに待っていてくれてとてもうれしい。また来年も元気を届けに行きたい。
- ・「おかき」「やしょうま」を地域の方と一緒に作ったが、地域の方も南三陸町の力になりたいという気持ちでいることがわかった。また、一緒に作ることを楽しみにしていたと知りうれしくなった。
- ・清観荘（宿泊先）のご主人から「中学生という年齢は、震災のように何かあった時、周りのために役に立たなければならない年齢だ。」というお話を聞き、自分も周りの役に立てる人間になりたいと思った。
- ・被災者の方から「どんなに辛くても、ずっと前からいて思い出がある街から離れたくない。」という思いを聞いて、「ふるさと」の大切さを感じた。私もこの筑北村で働くのもいいかなと思った。
- ・多くの被災者の方が「忘れないで」という言葉を、しっかり受け止めたい。

「被災地訪問」への自主的な取り組みに加え、これら生徒の発言から、本校が「被災地訪問」を通して生徒に願う、「自然への畏敬の念を深める姿」「多くのつながりに気づき感謝する姿」「ふるさとに心を寄せる姿」「実践力と発信力を高め、自己実現していく姿」は実現したように思う。

また、この「被災地訪問」の目的や取り組みに共感し、協力・同行し続けたきささげ応援団の方が、5年間の歩みを「絆—東日本大震災被災地訪問活動5年間の軌跡—」として、冊子にまとめてくださるなど、地域からも認められ生徒の人間形成の上での期待も大きい。5年前、生徒の願いから始まった「被災地訪問」。これからも生徒の逞しい人間形成に期待しつつ、生徒の訪問を楽しみにして下さる南三陸町に「元気を届ける」活動を続けていきたい。

